

## I. オバマ後のアメリカ

中山 俊宏 （慶應義塾大学 教授）

---

---

本来、オバマ大統領が意図したのは、内政面では分極化を修復し、外交面では9.11テロ攻撃への過剰反応をリセットすることだった。しかし、前者については、アメリカ政治の分断はオバマ政権下でさらに進行し、後者についても「リセット」自体が自己目的化し、「アメリカの退却」が多くの混乱を引き起こしている。

こうした状況の中、昨年11月の中間選挙でオバマ政権は歴史的な大敗を喫した。しかし、選挙後、オバマ大統領は選挙で大敗を喫した大統領とは思えないような積極姿勢を見せている。残された二年間、妥協するよりかは、進むべき道をあえて示し、レームダック化を避けるという狙いだろう。大きな賭けに出たといえる。

一年遅れで先日発表された国家安全保障戦略も、基本的には楽観的なトーンだ。全体としては2010年の戦略を引き継いでいる。イスラム国にしろ、ウクライナ情勢、シリア情勢にしろ、アメリカにとっての「実存的脅威」ではなく、むしろアメリカの過剰反応による混乱をおそれているような節がある。できることしかやらないという発想だ。しかし、その発想自体がアメリカができることを狭めてしまっている。

もう2016年の大統領選挙に向けた動きは本格化している。共和党は候補が乱立しそうな状況なのに対し、民主党はクリントンの動向がすべてのカギを握っている。アメリカ国民は、政治に疲れている。2016年は実際に「仕事ができる人物」を選ぼうという機運が高まるかもしれない。その構図はクリントンにとっては不利ではない。